大会観戦レポート
愛知世界選手権大会
2005 年 8 月 7-14 日

物語の続きはデンマークで

小林岳人

流れは変わった。愛知世界選手権から突破口を開いた日本チームが大活躍するのはこれからだ。

世界選手権大会 2005
2005 年 8 月 7 日（日）-14 日（日）
愛知県三河高原一体

イベントセンター。
三河高原が世界選手権の舞台になった。

コーフン！世界戦が日本で

WOC2005 期間中は強化委員という立場はあるにせよ、特に何かをするという役割はなく、単なる観客であり併設大会の参加者であった。しかし、それ以上になんといっても熱狂的な日本代表チームのサポーターである。WOC 自体の観戦は 1989 年以来 6 回目であるが、それらはみな北欧諸国やスイスといったいわばオリエンテーリング強国（大国）であった。それが、日本での開催である。WOC が日本にやってきたということ自体にすでに興奮！というわけでもある。

世界選手権を前に各国キャンプイン。

イベントセンターがオープンしたという話を聞きつけ、いてもたってもいられなくなり、7 月末の作手村での強化合宿への手伝いは、日本チームのサポートと同時に WOC2005 の様子を一刻も早くこの目で見たいという気持ちも大いにあった。前述のように WOC 期間中は何をすることもないのだが、8 月 5 日に現地入りして翌々日にミドルの予選というのは、あまりにも気持ちの準備が出来そうもない。

2005 年は世界選手権の夏！

愛知できっと何かが起こる

さて、以前にオリエンテーリングマガジンに書いたようにこの WOC はあまりにも「未知」なのである。単なる一観客に過ぎない私自身にとっても、あーでもないこーでもないということが頭をめぐり、それが一つの不安とでも言い表すような形として頭の中に残るようになっていたのである。不安とは未知への不安である。

その不安の対にあるのは大きな期待でもある。大きな期待とは、明らかに今までの WOC ではありえなかったような日本チームの活躍を願っているし、逆に、もしもその活躍がなかったら、今後の日本におけるオリエンテーリングシーンがあまりにもさびしくなるのでは（僕自身にとっての）、そして、世界のオリエンテーリングシーンがはるかかなたにいってしまうのではと。

考えてみれば、運営役員でもない、地図作成者でもない、選手でもない私がそんなことを思うのはあまりにも身勝手なのかもしれないけど。けれども、未知が少しでもこの期待への力になってくれたらと。7 月末に作手村に行ったのは、このような僕自身の期待について、少しでも事前に何か解答が得られるのではということであったのである。

「各国ナショナルチーム続々と到着、トレーニングテレインでトレーニング」というような雰囲気を WOC がはじまるということ自体では期待想定し、一方では「各国ナショナルチームがトレーニング、生活に苦慮」というようなことも想定していたのかもしれない。

イベントセンターでは日本でのトレーニングについて事前にメールをやりとりしていたカナダチームのブレント・ランドバックとフィリッパ・マクニール出会うが、彼らは田原のテレインへ行く交通手段がなくて困っていた。車に乗せて彼らをテレインへ連れて行ったが、これが現実と、他チームのことを思いやる。しかし、何より各国のナショナルチームがトレーニング・テレインでトレーニングをしているという紛れもない事実もそこにあったのである。

木陰に陣を敷くカナダチーム

ついに始まった世界選手権

そして、このような気持ちは、8 月 7 日のミドル予選の朝にピークに達していた。前日の夜ともなるとあーでもないこーでもないと頭の中を巡らしていたことが、具体的に日本チームの何人がこの予選を通過するかという一点に焦点は絞られていた。

今までの WOC では、この予選突破に大きな壁が立ちはだかっていた。その厚き壁の前に時には門前払い、時にはほんのわずかな差で越えられなかったのである。どんな工夫をしてでもできなかったのである。今回、この壁を越えられなかったら、いったいいつ越えることができるのであろうかとも。だから、「なんとしても越えねばならない」のである。「ウィニングタイムが 25 分と想定されている。これはちょっと短く見積もりすぎじゃないか。暑さとテレインのタフさから、若干落ちるし、

そしてばらけるに違いない。ボーダーは 31 分だ。」云々である。勿論、この予想にもやはり期待が込められているのであるが。

そしてレースははじまった。よりによって、トップスタートは鹿島田浩二である。そのため、この WOC で最初にフィニッシュエリアに現れる選手が鹿島田であることを祈りにも似た気持ちで待たねばならなかったのである。

そう、確かに WOC は始まった。次々と選手がフィニッシュエリアに現れてフィニッシュしていく。一度、始まっていくと、あれよあれよというようにどんどん進んでいく。

今までは、その流れと逆らうように日本選手がフィニッシュしていったのだか、今回は違った。確かに、この流れに逆らってフィニッシュする選手も多々いる。その中には、強国の選手やビッグネームもいたりするのである。そして、その流れに乗るかのように日本選手が次々とフィニッシュしていくのである。会場の雰囲気はいやおうなく高まっていく。日本選手の最後のスタートである紺野俊介のフィニッシュの時に、それは最高潮に達した。フィニッシュと同時に決勝進出を決める、7 日間に及ぶ大会への十分すぎるプロローグとなったのである。

ミドル予選の紺野。応援団の声援を浴びてベストラップを叩き出した瞬間

ミドル予選は絶好調

気候と地形と植生は明らかにレースを日本選手のスピードレンジの中に納めていた。そして、彼らは、ホームテレインならではの切れ味鋭いプレーを次々と発揮していたのである。ミスもそれなりにあるレースにもかかわらず、である。そしてミドル予選で 4 人の通過は、中上位国にひけをとらない結果となったのである。6 人すべてが通過した国がほんのわずかであり、全員通過できなかった強国もあった。私自身の気持ちは一気に楽観的になっていたのである。「もはや、予選を通過するのは当たり前」だと。

甘くなかったロング予選

しかし、その見積もりはそれほど甘くはなかった。いったん始まった WOC はよどみなく進んでいく。ロングの予選では気候と地形と植生で日本チームに完全なアドバンテージがあると確信していた。しかし、残念なことに以前に書いた記事のようにレースは展開していった。男女とも距離・ウィニングタイムが日本選手にとって、ちょうど厳しい距離・時間となってしまったのである。それでも女子チームはその壁をも越えていったが。

宮内と並んで女子ロング予選突破の先駆者となった元木友子。

スター不在の男子

男子の厳しさは日本チームにとってだけではなかった。ユーリ・オメルチェンコ（ウクライナ）もシャースティン・ヨルゲンセン（デンマーク）もその壁の前に決勝を走ることなく、WOC2005 を終えてしまったのである。二人とも大いなる実績を持つベテランであり、次回開催国・次々回開催国として今回の WOC でも決して手を抜いたというわけではないだろう。男子においては予選を突破することは、決勝でメダルを狙うような選手にとってももはや気の抜けない存在となっている。

しかし、これは裏を返せば、長らく続く主役不在の男子エリートシーンを象徴している顕著な出来事でもあるのだ。この状況は見る側にとってはつまらないものとしているのは明らかである。いい加減主役の登場が待たれる。

ミドル 3 連覇のティエリ･ジョルジュ（フランス）。ミドル予選コースを走る。
男子のスター選手と言えば彼くらいだろうか

女王 ･シモーネ！

対照的なのは女子。もはや、シモーネ・ニグリ・ルーダ(スイス)が女子オリエンティアとして史上最強であるということは誰も疑いをしないであろう。

２位に圧倒的な差をつけ個人・リレーと 1980 年代前半に WOC3 連覇を遂げたアニキャン・クリングスタッド（スウェーデン）、1990 年前後に史上最強の名前をほしいままにしたスウェーデンチームのリーダーでありエースであったマリタ・スコグム（スウェーデン）、優雅さと力強さを兼ね備えた美しい伝説の中の主人公である 1970 年代後半のリーサ・ベイヤライネン（フィンランド）といった史上に名を残す彼女らを、シモーネは越えたというよりも彼女らの良い特徴をすべて伴った存在となってしまった。

女王シモーネ（スイス）。愛知世界選手権の舞台は彼女のためにあったようなものだった。

魅力的では引けをとらないハンネ・スタッフ（ノルウェー）と比べてみてもこのことは対照的といえよう。あとは、オーリンゲンで８連覇し初期の WOC でも連覇したウラ・リンドクビスト（スウェーデン）の存在ぐらいであろうか。しかし、これも次回の WOC2006 の後には再び歴史のかなたに追いやってしまうに違いない。

シモーネは、予選・決勝・リレーを通じてすべてトップタイムであり、2位に圧倒的な差をつけている「完全」状態である。不幸（？）にもレース中、シモーネに追いつかれて遭遇してしまった選手は、そのまま表彰台まで連れて行かれてしまっているのである。（だから、これは幸運出来事なのかもしれない。シモーネは幸運を運ぶ女神でもあるのだ。）

このように、すべてのレースですべてのシチュエーションは彼女の驚きに満ちた物語を構成する部分にすぎない。常に笑みを絶やさない表情に、我々はただただ魅入るだけなのである。オリエンテーリングを超えて、すべてのアスリートの中でも、その存在は光り輝いている。彼女の存在だけで、WOC2006 もまた魅力的なイベントとなろう。スプリントで２位になったアンヌ・マルゲリテ・ハウスケン（ノルウェー）やリレーで２位になったノルウェーチームの表彰台での喜びようをみると、他選手にとってもはや２位になることが最大かつ最高の目標となってしまっているようだ。

他競技においても類似の例はアルペンスキーのインゲマル・ステンマルク（スウェーデン）ぐらいしか浮かばない。

女子ロング決勝。パックでフィニッシュしたシモーネ（左）とヘリ（右）がそれぞれ金メダル、銀メダルとなった。
フィニッシュ後レースを振り返る二人。

予選通過は当たり前？

話は日本チームから離れてしまったが、スプリントは前回の WOC で唯一実績を伴った種目である。予選突破だけではすでに驚くべきにはあたらなくなってしまった。波に乗る女子チームはそれに対してほぼ完全な形で答えてくれた。予選で皆川美紀子がアリーナに現れたとき、私は正直言って「コースが途中でループになっていて、そこを飛ばしてきたに違いないと」勝手に思い込んでしまっていた。

快走！皆川が決勝進出を決めた予選の走り

皆川については、７月末の最終合宿のリレートレーニングで、５分後にはじめたコントロールの撤収者に抜かれるという“失態”を演じていたわけである。観客の多くもその姿に半信半疑であったであろう。私自身は全く勝手に、「なんで大西君が一刻も早くこのコントロール飛ばしについてをアナウンスしないのか」とさえ思いはじめてしまっていた。ところが全選手の半ば過ぎがスタートしたころになされた大西君のアナウンスは皆川の決勝進出決定を早くも告げるものであったのである。

さらに、ミドルの予選で完膚なきまで叩きのめされた田島利佳も余裕の予選通過を果たした。もはや予選突破は“偉業”にあらず、その価値は見る影もなく下がってしまったのである。

この大会で決勝レースを走り第一線を退くと決めていた落合志保子が、「鋭い」レースを決めてミドルの予選を突破していたにもかかわらずこの前言を撤回した。この前言はあくまで決勝進出が“偉業”という前提の上でなされたのであって、この変心は十分にうなずけるものである。

欲望は果てしなく

そして、これから始まる各種目の決勝での順位となによりそれ以上にリレーでの上位、あわよくば表彰台へと、その欲望はもはやとどまることを知らない。ミドル決勝での番場洋子のリザルトボードの位置は、後から次々とフィニッシュする選手のスタートタイムが最大の関心事となるという「逆カウントダウン」となった。これは、WOC1997 のショートの決勝での村越以来の出来事である。まもなく訪れるシモーネのフィニッシュという驚きに満ちた物語の前のとても楽しいひと時となっていた。

番場洋子。ミドル決勝スタート。

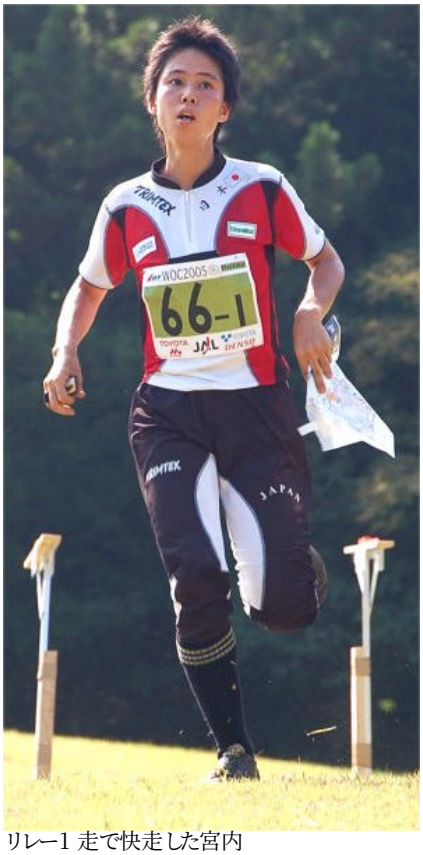
夢は現実になった

リレーでは１走の宮内佐希子がスペクテーターレーンでトップ集団から離れて通過したときに思わず「やばい、トップから遅れすぎてしまった」と口走ってしまったのは、今までの WOC のリレーでの中堅国になんとか遅れないようにすることだけを考えていた日本女子チームから考えれば、信じられないような言葉である。

そして、２走の番場への 13 位でのチェンジオーバーで落胆している自分も思えば信じがたい姿である。そして、２走の番場が 11 位に順位を上げて３走へチェンジオーバーしたという歴史的

な出来事に対してもたいした喜びを見せない自分は、いったいどうなってしまったのであろうか。（おいおい今までの日本の女子チームは、表彰式が始まってもまだレースをしていたんだぜ！）

そして、元木友子は、３走という段階であのヘザー・モンロ（イギリス）と同時に出走していく。こんな信じがたいシーンであるにもかかわらずなお「ヘザーについて行け！」なんていう無茶な声援を送っている自分はもうどうかしている。



リレー1 走で快走した宮内

それは、WOC2005 中盤でやや失速気味の男子チームが見せたあまりにも凄いパフォーマンスを目の当たりにしていたせいもあるかもしれない。

男子１走の山口大助がスペクテーターレーンでトップ集団の中ノルウェーのホルゲイ・ホット・ヨハンセンとフィンランドのヤルッコ・フウボラのあとをスウェーデンのニコラス・ヨナソンとともに走る姿である。

（このシーンはスウェーデンのオリエンテーリング連盟の Web サイトに WebTV のストリーミングビデオで見ることが出来る。必見の価値あり！）
http://www.streaming.telia.com/ startmedia/default.asp?k=373&i=748&n=vmd9.wmv&e=N

そして、この集団がやや延びたとはいえその中そのまま８位で２走へチェンジオーバーしていったのである。

山口のチェンジオーバーレーンでの走りを見て、思わず涙ぐんでいた観客が多数いたということを後で聞いたのだが、もしも、私もそんな観客が隣にいたら、もらい泣きをしていたかも知れない。これこそ我々が何年もの間チャレンジし続け、待ち望んでいたシーンなのである。このような形でオリエンテーリング後発のヨーロッパの国々は次々の中堅国の仲間入りを果たして行ったのである。

日本男子1走・山口大介、2走の高橋に8位でチェンジオーバー。日本が世界選手権に挑戦し続けて25年あまりを経て、夢のような光景が展開した。観客もクギづけ。

こんなもんじゃない

11位でフィニッシュした女子のリレーにおける史上最高の順位もたいして印象に残らない。３走の元木も二人に抜かれ二人を抜いての11位キープである。抜かれたうちの一人はチェンジオーバー直後のヘザー・モンロであり、さらにフィニッシュレーンでは10位でゴールしたデンマークのアンカーであるシーネ・セースとデッドヒートを演じているわけである。ところが、この元木のタイムは56分という凡庸なものである。これは、リレーに出れなかったほかのメンバーの闘志を煽るに十分すぎるものである。「自分でもこのくらいは出来るはず！」と。

そういえば、今回のメンバーから漏れてしまった加納尚子がロングの予選の午後に行われたチャレンジクラスで、予選突破のタイムを軽々と出していたということもあった。気温も上昇し、また緊張感もない中でのレースで、成し遂げたことは、ひそかにチーム全体への刺激となっていたに違いない。

物語はつづく・・・

WOC2005 が終わり、始まる前は終わった後は感傷に浸っているに違いない、Elton John の Curtains でも聞きながら車を運転しているのだろうなんて思っていたが、カーステレオから流れてくる曲は Dancing Queen から始まる ABBA のダンスミュージックを中心としたヒット曲集となっていた。気分はすっかり北欧。今終わったばかりなのに、一刻も早くこの話の続きを見たいという気持ちでいっぱいとなっていたのである。この話の続きの舞台とはまぎれもなく WOC2006 デンマークである。

そして、そこでの話こそがこの話を夢物語に終わらせない、後々までの物語として続くものとなるのである。それは時には浮き沈みもあるかもしれないけど、果てしない夢に向かって続く壮大かつ、美しく、そして楽しい物語なのである。

WOC DENMARK
1-5 august 2006

もうヨーロッパだけじゃない

３位を目指してフィニッシュレーンでスイスとスウェーデンのアンカーが競うシーンでダニエル・フブマン（スイス）に対して早々と競ることをやめて力なくフィニッシュしていったエミール・ウィングシュタッツ（スウェーデン）の後姿には「もう限界」という雰囲気が漂っていた。４回も来日して合宿をしてこの大会に賭けていたイギリスチームはヘザー・モンロのスプリント３位のみに終わり、リレーでは男子のエースのジェミー・スティーブンソンがケガを負いリレーに出走できず、女子は２走までで日本チームの後塵を拝するという残念な結末に終わっていた。強国たちにとっても WOC2005 が厳しい大会であったことを如実に物語っている。そして、同時にこのことは、オリエンテーリングというスポーツ文化がヨーロッパ文化の独占物ではないということ、世界中のオリエンティアにとって、チャレンジするべき新たな存在が、極東の島、ジパングにあったという紛れもない事実なのである。

（小林岳人）